

（『ロシア語通訳協会創立 30 周年記念 ここまで、そしてこれからの歩み』（2010 年）より縮小抜粋）

この「歩み」は、会報を初めとする各時期の資料、関係者への質問などをもとに編集部でまとめたものである。生きている組織の活発な、そして短くはない活動歴を正確に再現することはむずかしく、ご批判も出るだろうと思われるが、不完全な記述や偏りがあるとしたら、お許しいただきたい。事実を記録した年表その他の資料とあわせてご覧いただければ幸いである。全体の流れをつかむために、30 年をほぼ 5 年ごとの 6 つの時期に整理した（文中敬称略）。

1 草創期（1980～85）

1979 年 12 月のソ連軍アフガニスタン侵攻を機に、日本におけるソ連の評判はいちじるしく悪化し、ソ連脅威論の風潮が高まった。翌年 5 月の西側諸国によるモスクワオリンピック・ボイコット決定の前後には、各種の日ソ交流事業（貿易と経済協力の一部、文化交流、観光など）が縮小または中止され、日ソ関係は停滞を余儀なくされた。日本におけるロシア語通訳者の仕事は激減した。

そのようなときに、フリー通訳者の代表的存在であった徳永晴美（当時 33 歳）は「仕事のない今こそ、勉強ができるチャンスだ」と主張し、同志を募って 80 年 1 月 26 日に第 1 回「ロシア語通訳の諸問題」シンポジウムを開催した。ロシア語通訳の現場に立つ人間がおたがいの経験や知識を交換するだけでなく、それをあとに続く人たちに継承し、日本におけるロシア語通訳の水準全体を向上させようという目的をかかげたシンポジウムは大きな反響を呼び、180 名以上の参加者を得た。

この高まりを 1 回限りのものにとどめず、協力体制を組織的・永続的なものにしようと、有志が 8 月 30 日に会合を開き、これが「ロシア語通訳協会（当初は仮称）第 1 回総会」となった。仮規約が採択され、役員が選出されてロシア語通訳協会が発足した。このときの会員数はわずか 18 名にすぎなかった。

仮規約の設立目的に掲げられた項目は「ロシア語通訳者同士の経験交流および技能向上を図る。同じくその生活と社会的地位向上のために努力する。仕事の取り次ぎをおこなう。

活動は日ソ友好と平和の精神に反してはならないものとする。」の4点であった。この精神は今日に至るまで継承されている。

最後の項目のような表現は現在なら加わらないかもしれないが、当時の雰囲気と関係者の危惧を強く反映している。その後会員に配布された「ロシア語通訳協会お知らせ No. 1」は米原万里事務局長手書きであった。

発足後の協会の活動は目ざましいものであった。協会活動の中心である「ロシア語通訳の諸問題」シンポジウムはその後毎年1回1月末に開催された。指導的なロシア語通訳者たち（それはそのまま協会の中心人物であった）ばかりでなく、大学教授、ジャーナリスト、各種実務家、ロシアの外交官、他言語の代表的通訳者、その他多彩な人物が報告をおこなった。通訳者、関係者にとってシンポジウムは学習の機会であるばかりではなく、年1回、開催場所であった経堂の日ソ学院で顔を合わせることでできる「祭り」の様相も呈し、毎回100名を越える参加者が集まった。

一方で経験交流、技能向上という具体的目的追求のための学習会も年数回開かれるようになった。第1回目は82年4月に開かれて、漁業、軍事、組織名、役職名など各分野別の用語の紹介・解説がなされた。その後たて続けに国際情勢その他の時事用語、経済・貿易、学術・芸術などの分野の交流に必要な知識、用語、経験を相互に提供する会合が開かれた。学習会は82年だけでも5回を数え、その後も年3～4回の頻度で続いた。その他バスを借り切った観光ガイドの実習などがおこなわれ、のちの本格的な用語集となる各種用語の収集や配布なども精力的に続けられた。日ソ両国で製作・販売された各種参考書や、協会が音声の付加価値をつけた参考書なども製作・販売された。

一時は凍結状態だった日ソ間の各種交流も徐々に活発化していった。通訳者にとって、協会は大きな吸引力をもつことになり、発足時に18人であった会員数は1年後に30人、3年後には48人と増大した。

協会の存在感はどんどん大きくなり、問題も生じ始めたが、それでも全体としてこの時期の活動が円滑に進んだ最大の理由は、ロシア語通訳の世界で最も実力があり、周囲からも高く評価され、旺盛に活動していた人たちが、同時に協会役員あるいは活動の中心的存在として、協力作業を率先遂行したからだろう。

会員相互の親睦にも大きな努力が払われ、折にふれて懇親会が開かれた。1985年12月

に創立5周年のパーティーが開かれたのは、会員数が80人に達し、翌月には総会、シンポジウムともに7回目に達しようというときであった。

必ずしも通訳の仕事をしていない人も相当数入会しないと、80人もの会員数とはならない。協会は実際に通訳の仕事をする人たちだけではなく、その道を志す人たち、ロシア語の勉強をする人たち、ソ連に関心をもつ広い層の人たちをも引きつけたのであった。現場で活躍する若い通訳者たち（その中心的役割を担った役員たちも若かった）の新鮮なエネルギーが炸裂し、あとに続く人たちだけでなく、先輩たちまでも巻き込んだ熱気の渦が広がっていったのだった。

2 発展・拡大期（1986～90）

おりしも本国ソ連では社会が大きく動こうとしていた。80年代初めのソ連では長い「停滞の時期」のあと、病弱や老齢の指導者が続いて、社会はすっかり活力を欠いてしまっていたが、85年3月に50代で生气いっぱいの書記長ゴルバチョフが登場したときには、新しい時代の幕が開こうとしている予感を与えた。国民に呼びかける演説の声にも、口調にも、言い回しにも、今までになかった何か明るい、力強い兆しを感じられるようになったのである。

内外の多くの人たちが、春の香りを嗅ぎ取った。当初はほのかだったこの香りは急速に広がり、具体的な新政策が出る前から、人々の心には期待のようなものが広がっていった。これが、ゴルバチョフ指導部の新しい政策の急速な拡大・発展、ペレストロイカとグラスノスチ、共産党一党独裁の統制から外れた民主化・自由化の進展、そして社会主義体制弱体化と崩壊というあの激動の時代の始まりだった。当初はぬるま湯ムードを吹き飛ばすきびしい節酒政策や、深刻なチェルノブイリ原発事故など、黎明に影を投げかけるようなできごとが起こったが、時代の流れはそれらをむしろ刺激剤のように取り込んで急速に進んだ。

ソ連社会の自由化が進むにつれて当然交流もさかんになり、日ソ間の交流も従来の各種政治友好団体、労働組合、貿易などの枠を超えて広がり始めた。ロシア語通訳者の仕事の場は会議、シンポジウム、各種テレビ放送へと広がり、内容も多様化していった。「仕事がない今のうちに勉強を」と言った徳永の判断はみごとに当たり、協会の活動はまさにそのような時代の要請に応える結果となった。

協会役員たちは最も売れっ子の通訳者であったが、忙しくなったこの時期にも組織の発展と充実の努力を続けた。シンポジウム「ロシア語通訳の諸問題」はその後も毎年着実に回を重ねていった。部外者も多数参加するシンポジウム以上に、通訳者の仕事に密着した形で開かれる学習会は 84 年 4 月に累計 10 回を数えていたが、87 年 5 月には早くも 20 回を超えた。テーマは政治、経済、法律から漁業、観光、医学、特許など広範にわたった。

87 年には学習会活動のまとめとして最初の本格的用語集『軍事用語』が完成、発行され、300 部のうち 200 部がほぼ即売であった。協会は出版委員会を設立し、第 2、第 3 の用語集作成作業を精力的に進めた。

この年、大阪では「ロシア語通訳学習会」が開かれ、また札幌では第 2 回「ロシア語愛好者の集い」が開かれた。協会本部はこの双方にロシア人講師を派遣し、教材を送付するなど、支部活動を支援した。大阪と札幌では事実上の支部活動が始まっていく（支部の正式発足は 92 年）。

1989 年はベルリンの壁が崩壊（11 月）した年として歴史に残ることとなった。その約半年前には天安門事件が起こった。その時期（デモ隊の広場すわりこみ開始時）にはゴルバチョフ書記長が北京を訪れていた。ソ連国内では 5 月に第 1 回人民代議員大会が開かれ、ペレストロイカはいよいよ民主化・自由化進展の時期に入っていた。日本ではいわゆるバブル経済がピークを迎えていた（そのしばらくあとに、バブルは崩壊する）。

時代は大きくうねっていた。90 年 1 月の第 11 回シンポジウムでは「ロシア語を取り巻く新しい状況」と題したフリーディスカッションの場が設けられた。そしてその年の 12 月、協会は創立 10 周年記念パーティーを開いた。

3 激動対応期（1991～96）

1991 年 4 月にはゴルバチョフ大統領が来日したが、その数ヵ月後にはいわゆる 8 月クーデターが起こり、年末にはロシア、ウクライナ、ベラルーシ 3 国元首による連邦条約失効宣言と、ゴルバチョフ大統領およびソ連最高会議によるその承認をへてソ連邦が消滅してしまい、15 の新しい独立国が誕生した（バルト 3 国が前年に独立回復宣言を発するなど、事態の経緯は単純ではなかったが、詳細は省略する）。しかし当然ながらロシアと旧ソ連各国の激動はなかなか収まらなかった。日本とロシアの各種接触面で仕事をする通訳者はこの

大変動に振り回され、翻弄された。

ロシアにおける政治的な自由は爆発的に増大したが、経済は事実上破綻した。ロシアは対外債務返済能力を失い、日ロ貿易はほとんど停止してしまった。しかし日ロ間の各種交流（つまり通訳者の仕事）は種々の理由によりしばらくの間むしろ拡大した。ただし状況は従来とまったく異なることになる。通訳者の仕事は従来の友好交流、貿易関連などから各種支援（非核化、人道、市場経済化、学術・文化交流など）に様変わりしたのだ。

その大変動の時期に協会は成長を続け、様々な活動を展開している。他言語には協会に類する組織がない（設立の試みはあちこちにあったようだが）。協会は他言語の通訳者たちからは羨望の目で見られていた。第1回シンポジウム開催の2年前に出版された、ロシア語通訳者の教科書ともいえる宇多文雄・徳永晴美著の『ロシア語通訳読本』（日本放送出版協会）のようなものも、関係者数がまるで異なる英語を別格とすれば、他言語には存在しなかった。

学習面に関してこの時期で特筆すべきは、おおがかりな医学用語集の『和露編』（204 ページ約 4600 語）と、学習会の資料その他を収録した『付録』（98 ページ）および日本観光ガイド協会作成の『日本案内』のロシア語版が出版されたことである。医学用語集の編集責任にあたった会員は「協会がなかったら、これは絶対にできなかった」というが、『日本案内』の編集責任者だった会員も、これが可能になったのは「通訳協会というロシア語通訳の学習と情報のネットワークの核があったから」だと述べている。

その他の各種教材も番号を振ると 33 にまで達し、そのうち 26 番以降は 90 年度の作成だった。各種教材作成はその後も精力的に続けられ、94 年 9 月発行の第 9 号会報の「販売教材在庫一覧」には、語学・通訳技術、日本事情・観光、ソ連・ロシア、経済・貿易、用語集・辞書類などの分野にまたがって 18 種が登録されている。

シンポジウムは引き続き充実した内容を維持した。91 年の第 12 回にはより広い見聞を求めて中国語、フランス語、韓国語の代表的通訳者に出席・報告を求め、次の第 13 回ではタイトルから「ロシア語」を削除して「通訳の諸問題」とし、英仏中西通訳者によるパネルディスカッションもおこなわれた。また同じ回では通訳の問題点をえぐった寸劇「通訳の現場」、次の回では討論劇「人民通訳者大会」もおこなわれて好評を博した。ただ、これらの企画からうかがわれるように、毎年シンポジウムに新しい内容を盛り込むことが次第に困難となっていったのも事実である。

協会には口頭通訳に従事する人たちだけでなく、各種文書翻訳に従事する人たちも参加している（役員になった人も少なくない）。ソ連が健在なころはおおがかりなプラント受注にともなう技術翻訳を中心とするかなりの需要があったが、ソ連崩壊後はこれが中断してしまい、翻訳者たちは通訳者以上に深刻な事態を経験しなければならなかった。しかも歴史の長い翻訳の世界は通訳の場合以上に複雑であり、翻訳料は長いこと据え置かれていた。協会はこの「冬の時期」を乗り切るために、かつての通訳協会発足の例をあげて、翻訳者たちの団結・協力を訴えた。

95年1月の第16回総会において、2期4年つとめた小林が会長を辞任し、米原が就任した。この年の1月には阪神大震災、3月には地下鉄サリン事件が起き、世の中は騒然としていた。その中で、協会は組織問題の鍵のひとつである事務所開設を果たそうとしていた。

長らくの悲願であった事務所を開設できたのは翌96年の8月。代々木駅からすぐの便利な場所にある雑居ビルの3階で、ワンルームながらミニキッチンもついていた（ただし事務所仕様なのでバスはない）。事務所開設を「革命のようなもの」と会報は伝えている。おおがかりな会合はもちろん、少人数の相談をするにも会場を探さねばならず、時間のかかる仕事も役員が自宅へ持ち帰り、どんどんふえる資料や教材も役員が分散して自宅に預からなくてはならなかったことを考えると、これはまさに革命であった。

協会の歴史の節目になったことのひとつは、15周年の記念誌『ここまできました…』の発行である。96年11月には学習会も記念すべき50回の大台に達した。

95年1月の総会で会長に就任した米原は、その前年に徳間書店から『不実な美女か貞淑な醜女か』を出版し、95年には読売文学賞を受賞した。この本は抱腹絶倒の通訳現場のできごとを描きながら、通訳の本質的な問題も論じたもので、通訳という仕事に世間の関心を集める上で大きな役割を果たした。

4 組織の時代（1997～2002）

97年1月、「せまいながらも楽しい我が家」の事務所で初めて開かれた総会で会長に選ばれたのは、協会顧問の宇多文雄だった。

新役員が課せられた最大の問題は財政基盤の健全化だった。協会は財政上「このままやっていたら2年しかもたない」状態だった。その状態から抜け出すためには、まず実態を把握

しなければならなかったが、それまでの協会会計の構造は必ずしも明らかではなく、それを整理・分析する事務所の組織的能力が必要であった。また、協会活性化の重要な柱と位置づけられた会報を定期的に発行するためには当然大きな労力が必要だった。

これらの課題を解決するための役員の努力が始まった。協会の本部機能を日常化しつつ各種事務を処理するために事務所当番を決め（多数の有志の募集）、各種細則やマニュアルを整備し、会計をコンピューター化して赤字体質を発見し、そこからの脱を図るなどの努力が続けられた。その結果1年後の決算では収入が増大し、支出が切り詰められて、収支がほぼ均衡する結果となり、その状態を維持することも十分可能だという感触が得られた。

教材面では『原子力発電用語集（和露）』（130 ページ、1500 語）の出版が特筆される。また会報も予定どおり実質4回発行されて、会員間の情報伝達も改善された。

事務所開設から始まった協会活動の組織化は一応の成果を挙げ、特に財政上存続可能性が確認できたのは大きな収穫だった。協会はそれ以前の特定期間への過度な依存を脱して組織的実態をそなえつつあった。ただし、それが可能だった裏には事務局長を初めとする役員の献身的努力があり、事務所当番をはじめとする会員の協力も欠かせなかった。

組織的改変は役員会、事務局にとどまらなかった。従来各種催しの開催に当たっては会員だけでなく、関心をもつ人々に広く参加を呼びかけてきたが、これらの人々に協会への関与を高めてもらうために、通信会員制度が導入された。学生や、通訳業務周辺にいて関心のある人を対象にしたこの制度は好評を得て、半年で50名以上の申し込みがあった。

協会を組織化する路線は一応軌道に乗ったが、問題点も表面化した。役員、特に組織の要に当たる事務局長の負担が大きすぎて引き受け手がなくなったのである。

財政の健全化と役員の負担軽減は協会存続の条件だった。前者は一応解決されたが、後者は事務局長不在という変則的形態（実質は副会長による負担継続）となった。これを解決するため、2000年8月の役員会は、赤字覚悟で事務スタッフをおく決定を下した。

99年11月に『日本案内』第3版が発行された。日本観光通訳協会が発行した書物のロシア語訳だった前の版を3年かけて大幅改定した、いわば「自前の」ものであり、広く好評を博した。

99年8～9月には初めての読書会がおこなわれた。これは日本人にはなかなかかわかりに

くい問題のある作品を、名田スヴェトラナ講師の解説を聞きながら読む試みで、好評を得てその後長く続けられることになった。第1回でとりあげられたのは、セリフの多くがことわざや決まり文句として広く用いられるグリボエードフの『知恵の悲しみ』だった。その後新・旧約聖書、クルィロフの寓話集などがとりあげられた。2000年7月には第60回となる学習会がおこなわれた。

2001年1月の第22回総会で、2期4年つとめた宇多が辞任し、初代会長の徳永が再び会長に選出された。そしてこの年から事務局スタッフを雇用。専属スタッフが毎日事務所に詰め、仕事依頼の電話連絡から各種事務までをこなすことになった。これによって事務所当番を統括するだけでなく、協会事務の細部にまで責任を負ってきた（しばしば最終的には自分で処理してきた）事務局長および役員、当番会員の負担は大幅に軽減された。

シンポジウムや学習会その他の開催、会報発行などの活動はほぼ変わりなく続けられた。会計も関係者の努力によって、収支均衡状態が続いた。

しかし危機は別の方向からやってきた。有能な事務専従者がいても、役員にそれ相当の負担がかかることは避けられない。ボランティア活動に加わる顔ぶれが、限られたごく少数のままで経緯し、結果として組織内で「与える側と利用する側」への分化が深まったかのようには思われたのも事実だ。任期を終えようとしている役員たちは後任者を見つけることができなかった。

ここにいたって、会長の徳永は総会に協会解散を提案する決心を固めた。

5 解散の危機とその克服（2003～06）

この提案は当然ながら多くの会員に衝撃を与えた。この問題を決定するための総会に駆けつけた顔ぶれの中には、売れっ子作家として多忙な毎日を送り、かなりの間協会活動から離れていた米原の姿もあった。

説明にあたった徳永は、上に挙げた理由のほかに財政面について「財政逼迫の傾向は以前から危惧されてきた。いろいろの措置を考え、講じてきたが、身動きできなくなる以前に整然と残務整理することが重要との結論に達した。断腸の思いで無念だが、現役員会は、泥沼状態を未然に防止することが最重要との共通認識に至った」と述べた。

多くの出席者の意見に見られた雰囲気は「大変残念だが、存続不可能ならやむをえない」というものだった。そのときに米原が立ち上がって、自分は解散を阻止するためにここへ来た、協会は絶対につぶしてはならない、存続のためなら自分は会長でも何でも引き受ける、と強い決意を述べた。それを聞いて、それなら自分もできることを引き受ける、という発言が続いて、役員人事が可能になり、協会の存続が決定した。

そして会長に米原が選出された。解散の瀬戸際まで追い込まれた協会は「肩肘張らずに、無理せずに、自分たちがしたいと思うことをしていく。それが長続きの秘訣」（米原）という方針を受け入れ、過去の実績にとらわれて無理をすることはしない、と申し合わせたのだった。

そのような経緯があったのに、新役員たちは申し合わせのように「無理せずに、したいことだけ」をするという方針に甘んじるのではなく真剣な努力を重ね、シンポジウム、各種学習会（名称いかに関わらず、会員の知識・経験の増大につながる催し物）などは例年にまさるとも劣らない規模と回数で開催された。解散動議につながった役員の過重負担を避けるため、会計、会報編集、学習会、名簿などの業務の分担を徹底し、役員にならなくても特定の運営活動に参加するサポーター制度が導入された。「無理せずに」の方針が公認されたことで、役員の心理的負担だけは軽減されたといってもいいだろう。

それと並行して事務の IT 化の努力も続けられた。会報や各種情報の E メール配信に関して準備が進められた。E メール配信の効果（印刷・郵送の手間を編集に当てられる）によるのか、会報のページ数は増大し、内容も豊富になった。ワープロの進化もあって、原稿の編集が以前と比べれば容易になった。会報だけでなく、各種情報や連絡（教材やビデオの在庫目録、新着ビデオ紹介など）も配信されるようになった。

IT に詳しい会員たちの協力によりホームページも開設された。

04 年 7 月には『ロシア語会話とっさのひとこと』が株式会社 DHC から出版され、この種のものとしては大きな売り上げを示し、まもなく増刷された。これは協会の有志多数が執筆した合作であり、読書会の講師である名田スヴェトラナの全面的協力を得て、現代日常ロシア語の生きた会話表現を多数取り入れたユニークなものである。

04 年にはシンポジウムは開かれなかったが、学習会の内容と形式は多様化した。おおがかりな会合をしないまでも、「できる人ができることをやる」姿勢によるものだろう。学習

会では、会員でもある原ダリア講師によるていねいな添削講座が人気を博し、その後長く学習会の定番となっている。

04年4月15日、利便性、面積その他の条件に関してそれまでの事務所にほとんど劣らない部屋が見つかり、協会事務所は茅場町へ移転した。これにより、事務所経費は年間50万円以上の節約となり、財政はより安定することになった。新しい事務所には「LL もどき」と名づけた装置がすえつけられ、同時通訳設備によく似た環境で訓練することが可能になった。

05年、映画会をふくむ各種学習会が12回も開かれ、現役ガイドチームによって『日本案内』の増補改訂版が発行され（2009年には増補改訂版の第2刷が発行された）、関西支部の『京都案内』が完成するなど、旺盛な活動が見られた。

そして10月には協会発足25周年記念シンポジウムが開催された。サルキーソフ山梨学院大学教授の「日ロ関係150年」と井桁貞義早稲田大学教授の「最初の日露辞典を作ったゴンザ」の2講演と、参加者全員による討論会「通訳者として辞書を考える」をプログラムとするシンポジウムで、米原はみずから司会をつとめた。その後、記念パーティーが開かれた。

しかし翌年の06年5月25日、会長米原万里はこの世を去った。数年間に及ぶがんとの闘病の末だった。

それでもこの年、協会は各種学習会8回、映画会6回を開催し、会報も2回（その他総会報告）発行している。映画会はソ連・ロシア映画にくわしい熱心な会員によって精力的に開催され、学習会の定番となった。ちなみに、「学習会」という名称は当初の経緯から協会事務局が主催するかなり専門的なものにのみ用いられ、それ以外のものは講習会、講演会、読書会、映画会などと呼ばれたが、内容・形式の多様化と、「できる人、やりたい人が主催する」という実態上の変化をへて、区別がなくなっていった。

映画会や添削講座とならんで、04年からチェーホフ作品の「バイリンガル朗読会」も繰り返し催され、短編作品の朗読から08年の『子犬をつれた奥様』、10年の『チャイカ』のような、ある種の舞台表現へと発展していった。

6 今日まで (2007～10)

07 年 1 月、会長には再び宇多が選出された。

07 年にも各種学習会はさかんにおこなわれ、合計 11 回に達した。会報は 3 回発行され、08 年 2 月には 50 号に達した。

協会発足 30 周年に当たる 2010 年 1 月 11 日に総会が開かれた。その時点で会員数は 140 名（うち顧問 9 名、休会者 8 名）、通信会員 119 名であった。30 周年を記念する行事の開催、記念誌の発行が決定された。

創立以来 30 年以上たった現在もロシア語通訳協会は役員・会員・スタッフたちの努力で成り立っている。社会環境が変わっただけでなく、協会の会員構成、活動内容、雰囲気なども変化したが、一般に一世代といわれる時間を経たのだからそれは当然だろう。会員全員で協会の健在を喜び、これに誇りをもち、さらなる活動を続けてゆきたいものである。